

2023年11月22日(水) 札幌バプテスト教会 祈禱会

本日の聖書箇所：ローマ人への手紙8:31~39 (口語訳:新約 244 頁)

- 今日の箇所で、パウロは 12 回も読者に質問をしました。31 節：「神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか？」 32 節：「どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますでしょうか？」(新改訳) 33 節：「だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか？」 34 節：「だれが、わたしたちを罪に定めるのか？」 そして 35 節：「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか？患難か？苦悩か？迫害か？飢えか？裸か？危難か？剣か？」
- それぞれの質問に対して、パウロが導こうとしている答えは明白です。「キリストの故に誰もできない」ということです。100歩譲って・・・それらをするのに最もふさわしいお方は神さまだと言えるでしょう。神さまがそれを願うのであれば、私たちに敵視し、私たちに恵みを及ぼさず、私たちが成す一つ一つの事を指摘し、訴え、私たちを罪に定めることはいくらでもできるでしょう。けれども神さまは、ご自分の御子を十字架にお送りになるほど、私たちを心底愛されたのです。私たち一人一人は神さまの側から一方的に「よし」とされているのです。この部分はダメで、ここを改善してから「よし」とするのはありません。欠けがあるまま、まるごと「よし」とされ、愛されているのです。神さまご自身がこの決断をされたのですから、「わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことは」何もない・・・とパウロは断言し、これまでのローマ書で語ってきたことを締めくくっているのです。
- 人生の月日を重ねていけば、しばしば「終わってしまった・・・あきらめるしかない・・・もうダメだ」としか思えず、絶対的な終止符が打たれたような出来事が起こってしまいます。絶望や挫折・・・「死」という断絶はそれを最も感じさせる出来事かもしれません。けれども私たちの目には終止符としか見えない出来事が、神さまの目には区切りに過ぎないとパウロは言うのです。
- その根拠はキリストにおいて示された神さまの愛にあります。「イエスはもう終わった」・・・神と人から見捨てられる結末に思えたイエスさまの十字架の場面です。弟子たちでさえ「もう取り返しがつかない」と思い、途方に暮れていましたが、みじめな姿で呪いの木にかけられたイエスさまを、神さまは立ち上がらせました。「死」という命の終わりを復活の初めとされたのです。どう見ても終止符としか思えない出来事が、「よし」とされ、希望の通過点に変えられたのです。常識では信じられないことです。だからこそ信じるに値する希望がここに示されたのだと僕は思うのです。
- わが家の次女が生まれる時、担当医師に「命がけて生まれてくるだろう」と告げられました。これを聞いて、妻と一緒に悩みました。「どうなるのだろう・・・」と。そして、そこで妻に伝えたのは、「何があろうとも、娘は神さまに愛されているんだ」と。この真実が支えとなったのです。もはや、「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」ここに希望があると信じ続けたいものです。(西本詩生)

《祈りのリクエスト》

- | | |
|-----------------------|---|
| ① 教会の伝道の働き・教会財政のために。 | ⑨ 弁当分かち合いプロジェクト(毎週金曜)。 |
| ② バプテスマ・入会準備中の方々。 | ⑩ 各神学校と神学生のため。 |
| ③ 入院／療養中／高齢で来られない方々。 | ⑪ 道内の教会(無牧師の苦小牧)、
ハワイ・オリベット教会[姉妹教会]のため。 |
| ④ 誕生日・バプテスマを迎えた方々。 | ⑫ 日本と世界の平和のため(パレスチナ、ウクライナ、香港、ミャンマー)。被災地のため。 |
| ⑤ 主日礼拝(説教:西本牧師) | ⑬ 困窮した生活を送っている人たち、孤独や
苦しみに置かれている人たちのため。 |
| ⑥ 「聖書を学び合う会」の活動のため。 | |
| ⑦ ひかり幼稚園の働きのため。 | |
| ⑧ 「助け合い」Pのため(11月28日)。 | |

《私の祈りのリクエスト》